

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02161

研究課題名(和文) 三大一神教における中世法思想の比較哲学的考察：「自然法」と「啓示法」の再定位

研究課題名(英文) Comparative Study on the Concept of Law in the Three Abrahamic Religions

研究代表者

山本 芳久 (YAMAMOTO, Yoshihisa)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：50375599

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：別々の研究者によって研究されることの多い西洋中世哲学とイスラーム哲学とユダヤ哲学を同じ土俵に乗せて研究することによって、三大一神教(キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教)相互の思想的な共通性と相違の双方を明らかにした。とりわけ、西洋中世を代表する哲学者であるトマス・アキナス、イスラーム世界を代表する哲学者であるイブン・ルシュド、ユダヤ世界を代表する哲学者であるモーセス・マイモニデスの法概念を比較思想的に考察するための橋頭堡となる論文を発表することができたことが大きな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国においては、キリスト教に関しては、幼稚園から大学まで多くの教育機関が存在し、書物も多数刊行されるなど、ある程度馴染みがあるが、キリスト教と比較されることの多いイスラーム教とユダヤ教に関しては、専門の研究者はいるものの、一般的にはさほど馴染みのないものに留まっている。このような状況のなかで、キリスト教とイスラーム教とユダヤ教を同じ土俵に乗せて研究を進め、論文を公開することによって、国際社会で日々起こり続けている様々な出来事の背後にある三つの一神教の共通性と相違の双方を理解し、現代世界をよりの確な仕方理解するための一つの視座を提供することができた。

研究成果の概要(英文)：The originality of this study is found in the fact that western medieval philosophy, Islamic philosophy and Jewish philosophy are investigated in their mutual relationship. Both the similarity and difference between the thought of the Christian World, Islamic World and Jewish World are made clear by the comparative study of the concept of law in Thomas Aquinas, Ibn Rushd and Moses Maimonides.

研究分野：哲学

キーワード：トマス・アキナス マイモニデス イブン・ルシュド 中世哲学 一神教 自然法 啓示 比較哲学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

数回にわたる欧米への留学と国際学会への参加のなかで、中世哲学研究の新たな潮流に刺激を受け、日本の中世哲学研究に大きな欠落部分があることを痛感した。日本における研究は、ラテン・キリスト教世界における哲学・神学研究に集中してきたゆえに、同時代に他の地域において展開していた思潮に対する目配りが不十分であったという問題である。実際には、ラテン世界において中世哲学が展開していた同時代に、ユダヤ、イスラーム、ビザンティンなどの他の一神教諸文明においても、それぞれの神学体系と古代ギリシア哲学との対話が徐々に進んでいた。我が国においては西洋中世哲学に関しては数多くの研究が遂行されており、イスラーム哲学・イスラーム法・ユダヤ思想に関する優れた専門家も存在しているが、それらが孤立的な営みとなりがちであることに問題がある。このような状況のなかで、研究代表者は、ラテン語・ギリシア語とアラビア語・ヘブライ語という多様な言語で哲学的なテキストを読解しつつ一神教の比較哲学的考察を行うという研究課題の着想に至った。

2. 研究の目的

別々に研究されることの多い西洋中世哲学、イスラーム哲学、ユダヤ哲学を同じ土俵に乗せ、以下のような三つの成果を得ることが本研究の目的である。第一は、思想史研究における空白部分を埋め、古代哲学からイスラーム哲学・ユダヤ哲学を経てラテン・キリスト教世界に至る哲学史の多角的な再検討を行なうという基礎的研究の遂行である。第二に、法の哲学的根拠づけという哲学の根本問題の一つに関して、比較哲学的観点から取り組む。第三に、現代の焦眉の課題である文明間対話に関して、西洋近代的な観点からのみ取り組むのではなく、共通の地平のなかで文明を形成していたとも言える中世哲学の時代に着目することによって、三文明間の連続性と非連続性の詳細を明らかにし、新たな対話の可能性を見出す。すなわち、本研究は、哲学的・文献学的研究、法哲学的探求、文明論的対話という相互に関連した重層的な目的を有する。

3. 研究の方法

異質な複数の分野を同時に取り扱う比較思想的研究は、要求される課題が大きいために、広がりはあるがテキストの表層をなぞっただけの深みに欠ける研究になりがちである。だが、逆にテキスト解釈のわけ道に入りこんで、いわゆる木を見て森を見ない状態になってしまうことも避けなければならない。こうした両極の誤りを避けて有意義な仕方での研究目的を達成するために、本研究においては、初めに基本的な作業仮説を立て、その作業仮説をもとにテキストを熟読吟味し、そのことによって作業仮説に修正を加えていくという方法論を採用した。明確な切り口を持ったテキストの熟読によって、それぞれの分野の専門家に優るとも劣らない分析をそれぞれのテキストに対して行なうことによってはじめて、有意義な比較思想的研究は達成されるからである。

本研究開始時点において申請者が立てた作業仮説は、「自然法」概念に着目することによってこそ、三大一神教における法概念の比較哲学的考察に関する新たな切り口が切り開かれ、現代における文明間対話・宗教間対話にも資する知見が見出されるというものであった。この作業仮説が斬新なのは、ユダヤ法やイスラーム法の研究においては、多くの場合、「自然法」という概念を使用することが注意深く避けられているからである。というのも、「自然法」概念は、「啓示」のみではなく「理性」を法の大きな源泉として認める傾向の強いキリスト教的西洋における法理論において発展してきたものであり、そのような「自然法」概念を、「啓示法」を中軸としたユダヤ法やイスラーム法の研究において使用することは、キリスト教的なパラダイムをユダヤ教やイスラーム教のテキストに押し付けるものとして批判的に見られることが多かったからである。

こうした通念を吟味することを一つの目的としつつ、三大一神教を代表する哲学者として、ラテン・キリスト教世界からトマス・アクィナス、イスラーム世界からイブン・ルシュド、ユダヤ世界からモーセス・マイモニデスを選び、それぞれの法思想を、ラテン語およびアラビア語の原典に基づいて、「自然法」と「啓示法」の交錯という観点から分析することが、本研究の基本的な方法である。

4. 研究成果

比較研究の主な対象となる哲学者の一人であるユダヤ世界のモーセス・マイモニデスの法理論について、上記の作業仮説に基づいて研究を進めていくなかで、マイモニデスの主著である『迷える者の導き』のみでなく、多数の二次文献を読解した。そのなかで、作業仮説のとおり、まさに自然法的な観点の有無ということがマイモニデスの法理論についての研究の一つの論点となっていることが浮き彫りになった。具体的に言うと、マイモニデスのうちに自然法論を見

出そうとする優れた論考として、Michael P. Levine, “The Role of Reason in the Ethics of Maimonides: Or Why Maimonides Could Have Had a Doctrine of Natural Law even if He Did Not” (*Journal of Religious Ethics*, 14 (2), pp.279-295) および、David Novak, “Maimonides and Aquinas on Natural Law,” (John Goyette, Mark S. Latkovic, and Richard S. Myers (eds.), *St. Thomas Aquinas and the Natural Law Tradition : Contemporary Perspectives*, Washington, D.C. : Catholic University of America Press, 2004, pp.43-65)の立場を詳細に検討した。また、マイモニデスのうちに自然法論を見出そうとする立場に対する反論として、Novak の論考と同じ書籍に収められている Martin D. Yaffe, “Natural Law in Maimonides?” (pp.66-73) および John Goyette, “Natural Law and the Metaphysics of Creation” (pp.74-77)の立場を比較検討した。更に、より広くユダヤ教の神学・哲学における「自然法論」の位置づけについて、David Novak, *Natural Law in Judaism* (Cambridge University Press, 1998)の立場を吟味した。

また、イスラーム世界における自然法論の位置づけについては、Anver M. Emon, *Islamic Natural Law Theories* (Oxford University Press, 2010)を参考にしつつ、Emon が依拠しているイスラーム法理論の原典をアラビア語で読解し、イスラームの法学者・神学者・哲学者における自然法論に対する様々な立場に対する理解を深めた。

こうした研究をすすめるなかで、三つの一神教の法理論を初めて本格的に比較考察した「三大一神教と中世哲学：超越と理性」という論考を発表することができたことは、大きな成果であり、この論考を一つの軸としながら、三大一神教における中世哲学を巨視的に取り扱う単著『三大一神教と中世哲学：超越と理性』の執筆に取り組み、著作全体の過半を、2019年度までに完成させることができた。

また、本研究における比較思想的考察の最も中心的な軸となるラテン・キリスト教世界の神学者・哲学者であるトマス・アクィナスについての単著（『トマス・アクィナス 理性と神秘』岩波新書、2017年）が、2018年のサントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞した。

更に、本研究は、キリスト教を軸にしながらユダヤ教およびイスラーム教の法思想との比較考察を為すものであるが、比較の軸となるキリスト教の本質を浮き彫りにする共著として、『キリスト教講義』（若松英輔との共著、文藝春秋、2018年）を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本 芳久	4. 巻 701
2. 論文標題 トマス・アクィナスの聖書註解：著作群におけるその位置づけ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 理想	6. 最初と最後の頁 28-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本 芳久	4. 巻 728
2. 論文標題 「窓ガラス」としてのイエス：井上洋治神学の美しさについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 本のひろば	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本芳久、伊藤幸史、安岡治子、山根道公、山根息吹	4. 巻 104
2. 論文標題 井上神父とドストエフスキー：東方キリスト教を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 風（ブネウマ）	6. 最初と最後の頁 37-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本芳久	4. 巻 4
2. 論文標題 三一大一神教と中世哲学：超越と理性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nyx（ニユクス）	6. 最初と最後の頁 62-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本芳久	4. 巻 4
2. 論文標題 マッキンタイアの「トマスの実在論」：哲学探究の基本構造	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nyx (ニユクス)	6. 最初と最後の頁 156-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本芳久、稲垣良典	4. 巻 4
2. 論文標題 対談 スコラ哲学からの挑戦	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nyx (ニユクス)	6. 最初と最後の頁 10-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本芳久	4. 巻 21
2. 論文標題 マクシモス、ディオニュシオス、トマス・アクィナス：谷隆一郎訳註『難問集』との対話	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『バトリスティカ』（教父研究会編）	6. 最初と最後の頁 90-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本芳久
2. 発表標題 愛と靈的再生：説教者としてのトマス・アクィナス
3. 学会等名 教父研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 若松 英輔、山本 芳久	4. 発行年 2018年
2. 出版社 文藝春秋	5. 総ページ数 320
3. 書名 キリスト教講義	

1. 著者名 山本 芳久	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 viii, 274, 2p
3. 書名 トマス・アクィナス：理性と神秘	

1. 著者名 東京大学教養学部編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 270
3. 書名 分断された時代を生きる	

1. 著者名 安藤 礼二、若松 英輔編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 256
3. 書名 井筒俊彦	

1. 著者名 宮本久雄編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 201
3. 書名 愛と相生：エロース・アガペー・アモル (シリーズ教父と相生)	

1. 著者名 R・W・サザン	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 ヨーロッパとイスラーム世界 (解説「キリスト教とイスラム教の相互理解の原点」219-230頁を執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----